

衍習，辻堂演習等があり，競技としては相撲，銃剣術，棒倒し，駢足競技等があり，海軍士官として学ぶべきものが山積し，多忙で厳しいものであった。

このような教育・訓練を経て，海軍軍医学校で得た海軍士官であり歯科医師であるという自負心と自信を持って任地に赴き積極的に行動したことにより，永年の歯科界の労苦が報われたことと思われる。

最後に嘱託歯科医 5 名，歯科医科士官 16 名の方が戦没されたことを報告して，戦没者の冥福を祈る次第である。

19) チワキイズムの一考察

A Certain Consideration on Chiwaki-ism

東京歯科大学 ○山岸東太郎
森山 徳長
長谷川正康
石川 達也

Toutaro Yamagishi, Norinaga Moriyama,
Masayasu Hasegawa and Tatuya Ishikawa,
Tokyo Dental College

チワキイズムとは，「歯科医師である前に人間たれ」との教えである。現存する資料からチワキイズムについての一考察を試みることにする。

チワキイズムという言葉そのものが出ているのが，大正 12 年（1923）7 月に発刊された学生会創立 15 周年記念号の学生会誌に掲載されている千酔火が書いた「チワキイズム」の記事である。副題に“此の小編を熊サンの霊に捧げる”と記されている。熊サンとは学校の一用務員であった島根熊吉であり，彼に対して最初の学校葬が行われた。

チワキイズムについて，「凡そ人の血は血で培われ，人の心は人の心で養われるものでなければならぬ。赤い火花の散る心と心との太刀打ちに，策略や妥協の間に見得るものではない。何等の条件も何等の虚飾もない裸一貫丸出しで突進し，ぶつかり合った所に眞の人と人の結合が生まれ，その結合から人としての名々が生まれる。親子であっても，夫婦であっても，兄弟であっても，朋友であっても，師弟であっても，主従であっても，皆それでなければならぬ，第一義のチワキイズムは

即ちこれである。」と，また「……御互に尊重される事によって社会がよりよく保たれる譯だ。そこには競争も争闘もない。お互いに扶け合ふ事こそあれ——偉大なるチワキイズムの最後はここになければならぬ。」と記されている。

ここで千酔火は，人の心の大切さから人と人の眞の結びつきがあり，相互扶助の大切さを説いている。千酔火がいかなる人物かについては今後の調査によることとする。

昭和 4 年 5 月 20 日付，東歯学生会々報 No. 44 で正木正は，“この一篇を我等が若き七百の健児に捧ぐ”の中で「我等のチワキニズムとは何ぞや。それは，吾々が入学式の日親父である校長先生から人と人とが相和することであると教えられた。先生と学生が，同窓と学校とが一致協力団結して互いに相和し，学校を将来又歯科界を護り立てることである。……全てものは結合せねば作用を営まない。この真理は人と人との和にも適用できるものである。……」と記述している。チワキイズムが，人と人の和であり，結合即ち団結が大事であると書かれている。チワキイズムは，和の精神とも言える。和なくして結合はありえないのである。

昭和 42 年 10 月の東京歯科大学同窓会報 119 号に福島秀策が“血脇守之助先生の訓え（その二）11. 人間形成”で「先生は『歯科医になるまえに人になれ』ということをおいわたのでありましたが，まったく千古に徹するお言葉であったと思います。」と記述されている。この“千古”は，野口英世博士が，関東大震災の翌大正 13 年秋に「東京歯科医学専門学校よ永遠たれ」とニューヨークより血脇守之助に送った，“高雅学風徹千古”と揮毫された扁額の二文字からとったものである。

昭和 48 年（1973）の日本歯科評論では杉山不二が，「ある思いで—その 3（完）—」で「私は学生時代，更に卒業後もずっと，血脇先生から，歯科医師である前に先ず人となれという教えを受けた。歯科医師という職人になってはいけない。先ず人格を陶冶し，社会人として恥ずかしくない，立派な人間としての歯科医師であれということである。これは私にとって，終生わすれることの出来ない教えである。このことは，現在の東京歯科大学に於ける教育方針の一つである。」と記述されている。

畢竟するにチワキイズムは、「歯科医師である前に人になれ」と、常に人格の陶冶を促す、しかる後人の和こそ大切にし、結合することを説かれた。「歯科医師である前に人間たれ」と教えられてきたが、「人になれ」と説かれているところに大きな意味があるのではないか。「人間」より「人」の方がより具体的な響きがあるように思われる。

20) 千葉大学医学部歯科口腔外科並びに
日本大学歯学部口腔外科の創設者入
戸野賢二先生とその著書について
—佐藤運雄先生他主な関係者と著書
「口腔外科学」について

Kenji Nittono, Founder of Chiba University
School of Medicine Department of Oral
Surgery, Nihon University School of Den-
tistry Department of Oral Surgery and his
Work

—Kazuo Sato Other Main Persons Con-
cerned and “Oral Surgery”

日本大学歯学部	○工藤 逸郎
	三宅 正彦
	見崎 徹
	金山 利吉
	西山 實
	若松 佳子
	小室 歳信
千葉大学医学部	丹沢 秀樹

Itsuro Kudo, Masahiko Miyake, Toru Misaki,
Toshiyoshi Kanayama, Minoru Nishiyama,
Yoshiko Wakamatsu and Toshinobu Komuro,
Nihon University School of Dentistry

Hideki Tanzawa, Chiba University school of
Medicine

入戸野先生は現在の千葉大学医学部歯科口腔外科の創設者であり、また日本大学歯学部口腔外科の実質的な創設者とされている。

今回は主として入戸野先生の生涯と両教室特に佐藤運雄先生との関係、著書「口腔外科学」の変遷について報告する。

入戸野先生は佐藤先生の4歳下であり、明治42年(1909)26歳で京都帝国大学福岡医科大学(現九州大学医学部)を卒業後同大学副手となり、次

いで東京帝国大学医科大学歯科学教室の副手、助手を経て大正元年(1912)10月県立千葉病院第二外科部長に任じられ、同時に千葉医学専門学校の授業を担当した。更に文部省の歯科医術開業試験委員として同委員を明治44年(1911)6月から大正5年(1916)4月迄務め、佐藤先生と重複している。佐藤は米国留学中から交流を始めた東京帝国大学医科大学歯科学教室初代主任石原久助教授の下に明治36年(1903)帰国後、同教室に入局し、明治37年(1904)講師に昇格し、明治41年(1907)迄勤務している。佐藤は明治41年から明治43年(1910)迄渡満している。その間は入戸野先生との交流はなく、両者が東京帝国大学医科大学歯科学教室で同時期に勤務したことはないが教室の同門として交流が始まったものと思われる。入戸野は大正7年(1918)35歳で千葉医学専門学校教授に昇格し、第二外科部に歯科診療施設が新設され、この年が現在の千葉大学医学部歯科口腔外科の創設年とされている。佐藤は自ら創設した東洋歯科医学専門学校を大正11年(1922)には日本大学と合併し、日本大学専門部歯科とした。大正9年(1920)4月には入戸野、佐藤共著の「口腔外科学」の初版が発行されている。その後本書は入戸野が海外留学から帰国後大正13年(1924)から入戸野の単著となった。大正10年(1921)帰国した入戸野は東大医学部講師併任となり、大正12年(1923)千葉医学専門学校は千葉医科大学に昇格したが、単科大学に歯科の講座は置かないとの制度のため入戸野は講師に格下げとなり、本邦の口腔外科の発展のために大きな損失となった。入戸野は大正14年(1925)千葉医科大学を退職し、丸ビルに開業する傍ら、日本大学専門部歯科非常勤教授として佐藤に協力したが、昭和2年(1927)5月脊椎部腫瘍のため44歳で逝去された。大正11年(1922)6月日本大学専門部歯科医院の名簿中に教授入戸野賢二の氏名が記載されている。大正14年(1925)11月に関東大震災後の校舎、病院が完成し、外科手術室、病床も完成し、口腔外科主任として入戸野賢二の記載があり、当年を口腔外科としての創設年とするのが妥当と思われる。